

令和2年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

事業実施報告書

- I スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び
- II マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成
- III スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築
- IV 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成
- V スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成

道府県・政令市名【福島県】

学校名【 福島県立いわき支援学校くぼた校 】

1 実践テーマ	【Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ】
2 実施対象者	対象学年：全生徒 生徒数：26名
3 展開の形式	(1) 学校における活動 ① 教科名 (保健体育) ② 行事名 (講演会) ③ その他 () (2) 地域における活動 ① イベント名 () ② その他 ()
4 目標 (ねらい)	(1) スポーツから共生社会の実現を目指して、互いの多様性を理解し尊重できる人間性の向上を目指す。 (2) 様々な障がい者スポーツを知り体験することで、多様性を理解し自分たちにもできることを考える。
5 取組内容	(1) 保健体育「パラリンピック種目の理解（ポッチャ）」の実施 ア 日時 令和2年 11月 4日（水）、11月 5日（木）、11月 6日（金） 11月11日（水）、11月12日（木）、11月13日（金） イ 対象 いわき支援学校くぼた校：全学年 「保健体育」（26名） ウ 内容 「パラリンピック競技の体験」 エ 方法 保健体育授業



(2) 外部講師による講演会の実施

ア 日時 令和3年1月14日(木) 13:30~15:00

イ 対象 いわき支援学校くぼた校 全生徒(26名)

ウ 内容 「パラスポーツの体験と競技の魅力について」

エ 講師 株式会社さんしゃいんクレハ

矢内 菜々美 氏



(3) 講演会事後アンケート実施

ア 日時 令和3年1月14日(木)

イ 対象 いわき支援学校くぼた校 全生徒(26名)

ウ 内容 「パラスポーツと障がいの理解」

6 主な成果

(1) 各実践から

- ・ 継続して、オリンピック・パラリンピックの情報や種目に触れる機会を設定してきたことで、「応援したい」「もっと知りたい」という思いが向上してきた。

また、生徒たちの中で「ボッチャ」競技の技術が向上してきたことで交流学習に積極的に参加しようとする生徒も増えてきた。

- ・ 車いす陸上競技で世界大会出場を目指す現役アスリートを講師に迎えて、今年度はくぼた校独自の講演会を実施した。車いす陸上競技の体験・実技指導や競技の魅力等についての内容の講話を行ったことで、障がい者スポーツについての興味関心や理解が深まった。また、様々な障がいや個性のある人たちが、それぞれの形で競技に取り組んでいること、多くの支えがあって競技を続けられているという話を聞き、スポーツは「する」だけでなく「支える」というかかわりかたについて考えることができた。また、今まで体験したことのない車いすを体験できたことで、自分との違いや障がいの理解と個性の理解へと繋がった。

(2) アンケートの結果から

- ・ 本事業の実施後に、本校全生徒を対象にアンケート調査を実施した。

	<p>※ 実施日 : 令和3年1月14日(木)</p> <p>※ 内容 「パラスポーツの理解」</p> <ul style="list-style-type: none"> アンケート結果では、「車いすに乗ったことがない」と答えた生徒が9割で、障がい(肢体不自由)に対する理解もほとんどなかった。実際に体験を通してほとんどの生徒が「楽しかった」「もっとやりたかった」という意見が出されるなど、車いす陸上競技の魅力について触れることができた。体験を「楽しい」と答えた生徒がほとんどだったが、「実際に車いすでの生活が想像できるか」という項目については、「想像できない」「大変」などの意見が多かった。 今回の体験を通して、「自分たちにできることはなにか」という項目について、「困っていたら助けてあげたい」「パラリンピックをみんなに知って欲しい」等の意見があり、自分たちが支えてもらうだけでなく、「支える」という視点で考える機会になった。また、車いすを実際に体験したことで、競技の魅力と大変さに気付くこともできたと考えられる。
7実践において工夫した点(事業の特色)	<ul style="list-style-type: none"> スポーツを通して互いを認め合うこと、支え合うことの大切さの理解を目的としていたことから、講演会では「競技の魅力」と「競技の特性」だけでなく、スポーツを通して学ぶことのできた「人間性」や「人との繋がり」について講演内容を依頼した。 実際の講演では、普段体験することのできない、競技用の車いすを体験できたことで、「競技の魅力」「苦勞」について触れることができた。また、地域で活動される方を講師でお招きしたことで、より競技への「関心」と「応援したい」という気持ちを高めることもできた。
8 主な課題	<ul style="list-style-type: none"> 本校では、併設する勿来高等学校との交流は充実しているが、その他の場面での交流は少ないのが現状である。生徒たちが継続して学習してきた「ボッチャ」を生かして小・中学校と交流をし、障がいに対する理解とパラリンピック種目の啓発に自分たちが参加できる機会が必要だと考える。また、他者と適切にかかわるコミュニケーション能力の向上と、多様性を認め合うために自分を知る場面の設定も必要だと考える。 本事業を継続して実施してきたことで、オリンピック・パラリンピックの理解や興味や関心も高まってきた。今後は自分たちが、障がい者スポーツの普及や理解啓発に向けてどんな活動ができるのか考える機会を設けることが必要である。また、スポーツを「支える」という視点をもって、自分たちにできることや役割についても考えていく必要がある。
9来年度以降の実施予定	<ul style="list-style-type: none"> ボッチャを通じた交流の場面では、一緒に活動するだけでなく、競技の「魅力を伝える」ために自分たちに何ができるか考え、準備を進めるとともに、交流の幅も広げていく。 障がいがあるから「支えてもらう」だけでなく、「支える」ことのできる豊かな人間性の育成を目指して、学習活動全体での指導の充実を図る。 障がい者スポーツの理解と啓発に向けて、地域資材を活用して体験的な活動に積極的に取り組めるようにする。